



建築人

11

2012

二〇数年ぶりになるだろうか。この夏、建築家・大高正人（一九二三〜二〇一〇年）の仕事を訪ねて、千葉市内にある三件の建物を駆け足でめぐった。「千葉県文化会館」（一九六七年）、「千葉県立中央図書館」（一九六八年）、そして、今回紹介する「千葉県立美術館」である。私事ながら、大高さんとは何度もお目にかかる機会があった。当時、相次いで取り壊しの危機にあった前川國男事務所時代の担当作の「神奈川県立図書館・音楽堂」（一九五四年）や「晴海高層アパート」（一九五八年・一九九七年解体）についてのインタビューに同席したのが最初である。その後、独立後の代表作として知られる「坂出人工土地」（一九六八年）が二〇〇三年に日本を代表する近代建築DOCOMOMO百選に選定された際には、その展覧会へ向けた打合せにもうかがった。

そして、同じく前川事務所の元所員だった河原一郎さんから、「前川國男のことを大高さんからも訊いておきなさい」との助言を受けてのインタビューもお願した。けれども、この最後となった二〇〇六年の単独の面談では、大高さんは前川さんの仕事には一切触れず、自ら手がけたさまざまな都市スケールの計画について、所長室の壁一面に貼られた図面を前に熱く語られた。「土地を細分化し、敷地内だけでデザインを競い合うことを続けていては、都市は少しも良くならない」という言葉が今も鮮明に残っている。その膨大な量と広範囲に及ぶ仕事の全体像は容易につかめるものではない。それでも、今回訪れた美術館に大高さんが求めたものの一端を感じ取ることができた。敷地は千葉港に隣接した埋立地の一角にある。訪れると、天然スレートの黒々とした屋根と独自に開発された「先積ブリック

構法」によって積まれた茶褐色タイルの外壁が目を引き建物が見えてくる。そのたたずまいは、どこか牧舎かワインの酒蔵のように寡黙で内向的だ。しかし、内部に入り先に進むと、コンクリート打放しの太い柱に支えられた大屋根に覆われた思いのほか巨大なロビーと展示室が現れる。屋根の切れ目から降り注ぐ自然光が聖堂のように神々しい。その一方で、窓の外には眩しい芝生の緑が広がり、屋根に囲まれた中庭を子供たちが走り回っている。大高は、この

記憶の建築

松隈 洋

千葉県立美術館 1974 年
大屋根と群造形に求めたもの



前面の広場からみる展示棟



大屋根の下に広がるロビー

の優劣の差は、疑問の余地がない。「フラットルーフを追放せよ」都市から、ごみ取りのような屋根を追放するのだ。野良猫があるく屋根をとりもどそうではないか。」（大高正人「独断の理由」『新建築』一九七六年十月号）

ここには、近代建築の中で長い間忘れ去られていた屋根の復権とでもいえる試みが込められていたのである。この美術館は茫漠とした埋立地を公園化するための中核を担うものとして計画され、建物自体も最初に建てられた展示棟に管理棟と県民アトリエ棟が順次接続されるように増築されていく。興味深いのは、それぞれの棟の造形にはあえて異なるデザインモチーフが採用されており、同時に、単位空間の連結による群造形が目指されていることだ。それは、かつて一九六〇年の世界デザイン会議に横文彦と共同で提案した群造形の進化したかたちにも見える。そこにはどのような考え方が込められていたのだろうか。この美術

館に先立って中央図書館が竣工した際、大高は次のような言葉を書き留めていた。

「旺盛な建築家の表現意欲を、町全体に押し及ぼすという単純明快な方法は、分化し発達した社会機構の中では全体主義の哲学にも近い暴挙に連なる可能性が高いといわなければならない。

町はまったく多くの人間の重なりあった作業によってつくられ、世代の交替があり、歴史の集積がある。その多様性、集積性のある都市をより良くつくるためには、より高度な部分と全体にかかわる制御組織を開発し、しかもそのコントロールシステムの下で、個々に自由な創造が活発に行なわれねばならないのである。私はその個と全体との相対的な運動システム、相関システムを群造形とよんだつもりであった。」（大高正人「群の秩序」『新建築』一九六八年十月号）

都市の無秩序な増殖を制御し、多様性と集積性を育みながら、都市の風景を豊かにできる建築のあり方を求めること。そこには、なぜ大高が広く都市スケールの活動へと踏み出して行ったのかについての初心を読み取ることも可能ではなからうか。それは、都市スケールの根本から発想されてこそ、建築が個々の敷地を超えて都市を構成する普遍的で好ましい存在へと進化できる、という確信に基づいていたのだと思う。生

前の言葉の意味がようやく実感をもって理解できたように思えた。目の前にあるこの美術館は、大高の生涯変わることのなかった建築に対する希望を今に伝えている。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士（工学）。一九五七年兵庫県生まれ。一九八〇年京都大学卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。二〇〇八年十月より現職。



大阪ホンマもん

テクノロジー Technology

ストックを活かしながら団地の構造(仕組み)を再編し、多様で自立的(持続的)な“まち”へ再生する 団地再編プロジェクト

－ 関西大学・集合住宅“団地”の再編(再生・更新)に関する技術開発研究の狙い －

倉知 徹 江川直樹

倉知 徹

1975年生まれ
北海道大学卒業、同大学院修了
神戸芸術工科大学助手 (2006-11)
関西大学先端科学技術推進機構
戦略基盤団地再編プロジェクト
特任研究員 (2011-)

江川直樹

1951年生まれ
早稲田大学卒業、同大学院修了
現代計画研究所大阪事務所 (1982-08)
建築家、関西大学環境都市工学部教授



写真1 大規模な集合住宅団地



写真2 1980年代のヒューム地区*2



写真3 2011年のヒューム地区

はじめに

わが国の人口拡大・都市化の時代に大量に建設された公的集合住宅団地は、住宅の老朽化や設備の陳腐化などの物理的な問題のみならず、高齢化率の上昇やコミュニティの弱体化などの社会的問題をも抱えている。その数は膨大で、公営住宅で約219万戸、UR都市機構賃貸住宅で約77万戸にもものほり、再生・更新のみならず維持自体も困難を極める。他方、人口減少時代を迎え、団地の縮退や住宅以外の機能の導入など、住宅地そのものの再生(＝再編)が重大な課題となっている。

本研究の目的は、このような集合住宅団地を、住宅および環境ストックの活用を図りつつ、住民が守り育て自立的に更新していけるような“まち”に再編(＝団地構造の修復型再編)する技術、具体的にそれらの事業を展開する手法、を開発し実践に活かすことにある。

団地の再生・更新に必要な4つの観点

① 囲い込まれた団地から開かれた団地への転換：都市基盤が整っていない地域に、効率的に多くの住宅を供給する目的で建設された団地は、周辺地域から独立した生活空間を形成せざるを得なかった。市街地化された周辺環境との連続性を実現する再編が、団地にとっても地域にとっても重要であり、地域全体を見据えた再編が求められる。

② 衰退・疲弊を食い止め持続するコミュニティにふさわしい環境への転換：ヨーロッパやアメリカでは以前から、特に公的な大規模集合住宅団地において、団地が荒廃する例が多くみられた。他方わが国では、これまで社会の大きな課題とは認識されていなかったが、実態は相当な衰退・疲弊現象が進行中であり、周辺コミュニティと融和して、これを食い止め、持続可能な環境に更新し得るソフト・ハードの仕掛け、仕組みが必要である。

③ 少子高齢化に対応した新たなライフスタイルにふさわしい環境への転換：団地は画一的な住宅を主として供給したことが特徴の一つである。しかし少子高齢化の人口停滞の時代にあっては、高齢者が安心して住めるだけでなく、若年層も住み続けられるような多様な居住環境の提供、整備が必要とされる。また、住宅の近傍に福祉機能など新たな居住以外の機能の存在が求められ、それらは地域全体の問題として、地域によって建設、運営されることが望まれる。

④ 殺風景で画一的な景観からうるおいのある景観への転換：都市化の過程で開発された団地は、

初期には新しいスタイルの住環境として人々の憧れの的となったが、他方で室内外の画一的空間形態は批判の対象ともなった。周辺の市街地とはあまりにも異質なこのような団地景観を改善し、豊かなコミュニティ生活を送るための空間を創出し、周辺環境と相まってうるおいのある景観を構成することが望まれる。

以上のような観点で団地の再生・更新を行う際に、団地を合理的に建設するために作られた「一団地建築物設計制度」(一団の建築群をひとつの敷地のひとつの建物と見なす制度)の解体、見直しが必要である。一団地制度でつくられている大規模な“団地”(＝敷地)を、小規模な単位に区分し、(それぞれが同時多発的に自由に)自立更新できるような形態に再編し、居住者が愛着を持って、主体的に参加できるスケール、空間単位に再編することがなによりも重要である。これらの構造的再編を、団地の全面建替えではなくストック活用型で行う、団地構造の修復型再編が、本技術開発研究の大きな目標である。

もうひとつの団地の特殊性は、沿道性の欠如である。住棟は周辺道路から後退し、もしくは背を向け、市民にとっての気持ちの良い“みち”空間、すなわち町並み景観を形成するという視点に欠けている。これが周辺市街地との連続性に乏しい大きな理由である。ストックを活用しつつ、沿道性を創出することも団地そのものの再生の大きな目標である。

こういった団地の持つ構造、仕組みの再編が、団地住民のみならず、地域まちづくりの観点からも重要な視点である。これらは、単にデザインだけの問題ではなく、目指している環境の実現のために有効な手法であり、欧州等の先進事例の多くで、再生ガイドラインの重要な要素となっている。

本技術開発研究の進め方

本技術開発研究は、初年度(平成23年度)の、既存成果の整理・研究、海外(欧州・アジア)等における再生・再編事例の研究と検証、空間評価の比較模型作成等に引き続き、二年目以降は、国内の団地を対象に具体的な再編への試設計・提案を行い、団地住民、地域住民、事業者、管理者、研究者などとのワークショップを通してこれを検証する。さらに、団地再編を進めるプロセスの提案、具体化への制度の検討等を並行して行い、最終的に「団地再編技術ガイドライン」として公表することを予定している。

欧州等の団地再編の動向とその目指すもの

日本における近年の団地再生は、住棟の建替えが中心で、事業性を重視するあまり、地域総体としての居住環境の向上、良好なまちづくりに貢献しているとは言い難い例も多い。URなど一部の建替事例では、本プロジェクトが目指す様な再編に近いものも見られるが、ストックを活用しての大規模団地の再編は未だ事例がない。

一方ヨーロッパでは、ダイナミックな団地の再生・再編が精力的に行われている。国により状況は異なるが、共通する点として、(1)均質な空間を解体し、愛着の感じられる多様な空間(領域性、沿道性等を有する空間)へと再生・再編、(2)特に専用庭や沿道のデッキ等、管理者を明確にする事によるミクロな土地利用の活性化、(3)公共セクターと民間セクターに加え公益的な社会セクターの存在と積極的な関与、(4)政府機関による再生事業推進への強力な支援、といった点が挙げられる。

(1)多様で自立的な空間への再編

イギリス・マンチェスターのヒューム地区では、1960年代後半にスラムクリアランス事業によりスーパーブロックと巨大な住棟による公営住宅団地を建設した(図1、写真2)。しかし、竣工後すぐに社会的・空間的に荒廃することとなり、1992年にイギリス政府の都市再生プログラム「シティ・チャレンジ」を活用し、ヒューム地区の再生事業が開始された。再生事業では、巨大住棟をすべて撤去し、かつての街路網を復活させ、小規模な街区を形成し、そこに沿道性を有する小規模な住棟を建設している(図2、写真3)。

オランダ・アムステルダム市のベルアミーア団地では、1960年代に近代都市計画思想と徹底した機能主義によるスーパーブロックと巨大な住棟による団地が建設された(図3、写真4)が、当初のもくろみと異なり、建設後すぐに荒廃することとなった。小規模な改善事業の後、1992年に行政、住宅協会の連携により大規模な再生事業が開始された。再生事業では、既存の巨大住棟の約半数を撤去し、さらに約半分を減築、残りを改修している。さらに、撤去した跡地では、細かな街路網を整備し、低層住棟中心の沿道性をもつ街区建築を整備している(図4、写真5)。団地内の道路構成を再編し、沿道性の豊かな“みち”空間への再生を図る手法は、ほぼすべての団地再生事例の目標となっており、ストックの修復活用と新築の混在が、多様な住環境形成上の共通手法となっている。

(2)ミクロな土地利用の活性化

先のヒューム地区や、ロンドンの多くの団地再生事業では、住戸専用の前庭や後庭を設けている(写真6)。これは、団地空間の中のオーバースケールな共用スペースが荒廃の要因となった点を反省し、日常の管理主体を明確にし、個人の領域とするために住棟の敷地に取り込んだものである。その結果、通りの側では住戸の生活感の表出が発生し沿道性が増すとともに、住戸から通りに向かう

監視と通りから住戸へ向かう監視によって通りの安全性が高められる。この手法は、近年のイギリスの団地再生におけるキーコンセプトとなっている「パーミアブルな住宅配置」の主要素である。オランダやドイツでも同様な事例が多く、ベルマミーア団地の新しい低層住棟にはすべて専用庭が設置されている(写真7)。

(3)社会セクターの存在と関与

ヨーロッパでは古くから中低所得者層を対象とした社会セクターによる「社会賃貸住宅」の供給が盛んであり、中でもオランダでは非営利組織である住宅協会による供給が盛んだった。公営賃貸住宅、持家(分譲住宅)と同様に住宅協会の存在意義が明確になっており、団地再生の過程で事業主体間での住宅移管や、住宅協会の再編などが行われている。イギリスでは、多くの社会住宅が公営住宅から地域の住宅協会へ移管され、再生事業により多様な住宅が供給されるようになっている。オランダでは、住宅協会の位置づけが変更され、民間競争力をもつようになってきている。

(4)政府機関による強力な支援

イギリスの団地再生事業では、1990年代環境省によるデザイン改善実験プロジェクトが実施され、初期の団地改善事業の1つに3000万ポンドが投資された。ヒューム地区では、1992年から始まる都市再生プログラム「シティ・チャレンジ」の補助を受け、再生事業が実施された。また、ドイツ・ライネフェルデでは、1992年から始まる連邦政府の「大規模ニュータウン再開発」援助プログラムによって1995年に南団地再開発マスタープランを策定した。このように、政府機関による事業や資金についての強力な支援をうけ、ダイナミックな団地再生事業が行われている。

我が国の団地再生に際し、これらの取り組みから学ぶ点が多い。住政策上の制度的な問題は中長期の問題としても、建築的、空間的環境に関わる構造的な部分は、すべての人間に共通の要素であり、我が国でも大いに参考にすべきである。

ストックを活用し、小さく解く、混ぜて解く提案

本年度、京都府八幡市のUR男山団地(階段室型中層5階建主体、賃貸4,600戸)を舞台に、再編提案(2012)を作成中である。団地内に住戸を借り、現地を常に確認しながら、また居住体験をしながらの作業である。住み続けたい住民にできるだけ好ましい環境に再編し住み続けてもらえる団地再生を目標に、ストックを維持活用しつつ、86条一団地の解体、周辺地域との連続性の確保、町並み景観の創出を図りながら、持続的な居住者参加型手法を導入しやすい形態に再編する、団地構造修復型の提案である。大阪市住まい情報センター(11/8-12)を皮切りに、吹田市千里NTプラザ(12/5-9)、八幡市文化センター(12/14-18)でその一端を公表し、その後はWSなども行って、提案の是非を検証していきたいと考えている。



図3 1992年のベルマミーア団地*3



写真4 かつてのベルマミーア団地*3



図4 2012年時点のベルマミーア団地の最終予想図*3



写真6 ロンドン・ストーンブリッジ団地の前庭空間



写真7 ベルマミーア団地の前庭空間

参考文献

- *1: URBED, 「Urban Scrawl」: Issue 2: Hulme」、2008.6. URBED
- *2: URBED資料
- *3: アムステルダム南東区役所、「BIJLMER HISTORY TOWNPLANNING AND URBAN DESIGN TRANSFORMATIONS FUTURE」、2011.11、アムステルダム南東区役所PPT

本プロジェクトは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究(平成23～27年度)」(代表:江川直樹、鳴海邦碩、末包伸吾、岡絵理子、橋寺知子(以上関西大学)、大坪明、高田光雄、小玉祐一郎、平山洋介、小浦久子、糟谷佐紀、室崎千重、林泰義、藤本昌也、安原秀、星田逸郎)として、その他特任研究員(倉知徹)、PD(宮崎篤徳)、RA等(保持尚志、増田和起、片岡由香、高岡淑恵、荒木公樹)、客員研究員(角橋徹也、増永理彦、菊田純一、眞鍋仁、三谷幸司、藤岡米、久光弘記、佐藤健正)及び関西大学、協力他大学の学生諸君との協働のもと、実施するものです。



敷地は奈良市郊外の閑静な住宅地にあります。今では以前のような子供の遊び声や聞かれなくなり、少しでも活気ある町になるように、両親の近くに移住することにされました。
トップライトの光により、昼間でも明るい家となっていて、家族室にはいつでも集えるように大きめのテーブルを配置しています。吹き抜けやガラス欄間を通して、光や風が通り、家族の気配を感じることが出来ます。2階の子供室はオープンで使われることを意図していますが、将来、自由に間仕切れるように建具としています。深い庇は夏の日差しを遮り、雨による建物の劣化対策にも役に立っています。

所在地：奈良県奈良市
用途：専用住宅
竣工：2012.3
構造規模：木造
地上2階建
敷地面積：218.27㎡
建築面積：83.53㎡
延床面積：137.20㎡
写真：大島勝寛



敷地は田畑を開発した建築条件付きの造成地で、典型的なニュータウンの一区画です。建築は夫の仕事柄生活パターンが他の家族と異なる為、相互がその生活パターンに支障をきたさない事に配慮した計画となっています。役割の違う二つの中庭を内包し、それぞれの中庭が生活を豊かにする為に貢献しています。

所在地：滋賀県草津市
用途：専用住宅
竣工：2011.6
構造規模：木造
敷地面積：265.01㎡
建築面積：118.42㎡
延床面積：165.51㎡
写真：富田英次

INFORMATION

Sponsorship

建築士会からのお知らせ

平成24年度既存木造住宅の耐震診断
改修講習会《限界耐力計算講習会》
12/7 CPD6単位

日時 12月7日(金) 10:00～16:30
会場 大阪府建築健保会館6階ホール
定員 100名(申込先着順)
受講料 会員6,000円 一般8,000円
テキスト代金 3,500円

平成24年度既存木造住宅の耐震診断・改修講習会《一般診断法講習》
11/27・12/18 CPD5単位

日時 11月27日(火)・12月18日(火)
各日共11:00～16:30
会場 各日共大阪YMCA国際文化センター2階ホール
定員 各200名(先着順かつ希望順の申込
受付・定員になり次第締切)
受講料 会員5,000円 会員外9,000円
テキスト代 7,000円(2012年改訂版木造
住宅の耐震診断と補強方法)

平成24年度既存鉄骨造建築物の
耐震診断・改修指針講習会
11/13 CPD6単位

日時 11月13日(火) 10:00～17:20
会場 大阪府建築健保会館6階ホール
定員 100名(申込先着順)
受講料 会員6,000円 一般8,000円
テキスト代金 8,800円と5,000円の2種

建築士法にもとづく「建築技術講習会」
平成24年度 第4回 ～エコ～
11/16 CPD3単位

日時 11月16日(金) 13:30～16:15
会場 大阪府建築健保会館6階ホール
大阪市中央区泉町2-1-11
内容 ・外断熱とロックウールの最新事情
・再生エネルギーの全量買取制度と
太陽光発電
定員 150名(定員に達し次第締切)
受講料 建築士会会員2,000円、後援団体
会員3,000円 一般4,000円
(テキスト代含)

建築士の会 東大阪
わくわく探検(駅前シリーズ)第12弾
近鉄奈良線若江岩田駅から花園公園へ
(若江岩田・花園周辺史跡巡りと施設見学)
11/10 CPD3単位

今回は、高校ラグーマンのメッカである近鉄
花園ラグビー場のバックヤード及び花園中央
公園地下治水施設の見学もコースに組み入れ
ています。建築士の方はもちろん、一般の方

にも充分満足して頂けると思っております。
日程 11月10日(土)
集合 近鉄奈良線若江岩田駅改札口
スケジュール
9:00 受付開始
9:15 散策出発
12:15 クイズの回答、賞品授与
12:30 解散
募集 50名(申し込み先着順)
参加費 会員1,000円 会員外1,500円
※参加証は実施1週間前に出状予定です。

建築士の会 いずみ野
「貝塚寺内町の歴史講座と散策」
11/10 CPD2単位

日時 11月10日(土) 9:30～18:00
集合 南海本線貝塚駅2階改札口(9:30)
ところ 貝塚市南新町会所(国の登録文化
財・寺田家住宅の東側すぐ)
スケジュール
集合9:30 学習会①(貝塚寺内町の歴史
と文化)10:00～10:45 学習会②(貝塚
寺内町の民俗)11:15～12:00 休息(昼
食)12:00～13:20 寺内町散策13:20
～15:30 懇親会16:00～18:00
募集 30名(申込先着順)
講座参加費 2,000円(昼食費含む)
懇親会参加費 3,000円(別途)
※懇親会参加の有無を明記のこと！
※参加証は実施1週間前に出状予定です。

建築士のためのお茶会勉強会
11/21・11/27

建築士の礼儀作法のひとつとして、お茶の作
法を学ぶため毎月開催している勉強会です。
日時 11月21日(水)、11月27日(火)
18:30～20:30頃まで
(原則毎月第3水曜日及び第4火曜日)
費用 年会費6,000円+1回2,500円
(年会費はキャンセル時の水屋料などの
ため。但し途中入会の場合の年会費は
年度末までの月数×500円となります。)
先生 藤井宗熙(そうき)先生

建築士の会 南河内
重要文化財「天野山金剛寺金堂」
解体復元工事と登録有形文化財
「藤岡家住宅(奈良県五條市)」見学会
11/23 CPD3単位

昨年9月に実施した解体修復工事の第2弾
で、今回は、外壁修復等の工事を設計監理事
務所の青木弘治氏(公益財団法人文化財建
造物保存技術協会)にご案内いただきます。
日時 11月23日(金・祝) 8:30～18:00
募集 40名(申込先着順)
参加費 3,500円(昼食代、見学科金含む)
行程 8:30～9:00河内長野駅前集合・受付
9:00～9:30 バスにて移動
9:30～11:00 金剛寺金堂見学
11:00～12:00 バスにて移動
12:00～13:00 昼食
13:00～16:00藤岡家住宅見学、
五條新町通り町並み散策
17:00～18:00 バスにて移動

18:00 河内長野駅前解散
※参加証は実施1週間前に出状予定です。

大阪市景観整備機構4団体
平成24年度景観講演会
11/27 CPD2単位

日時 11月27日(火) 18:30～20:50
場所 大阪府建築士会会議室
内容
講演1 市民協働による景観まちづくりその1
「大阪市HOPEゾーン事業による建
物修景等を中心に」
講師 光岡正道(大阪市都市整備局技術監
兼HOPEゾーン事業担当課長)
講演2 市民協働による景観まちづくりその2
「全国の景観まちづくり、町家再生
などの取組み」
講師 藤田忍(大阪市立大学大学院
生活科学研究科教授)
定員 50名(申込先着順)
受講料 500円(資料代等・当日支払)
※申込された方には、後日参加証を送信いたします。

「エコを考える」第39回セミナー
再生可能エネルギーを考える ～環境に
優しいエネルギー 太陽光発電のすべて～
11/28 CPD2単位(予定)

日時 11月28日(水) 16:00～17:30
会場 TOTOテクニカルセンター大阪会議室
大阪市中央区久太郎町3-6-8
御堂筋ダイワビル
内容 ・再生可能エネルギーの固定買取制度について
～太陽光発電の実施工例の紹介～
講師 三菱電機住環境システムズ株式会社
太陽光発電システム事業推進室
江崎洋之助
・省エネルギー商品の紹介
～驚くような省エネ機器が商品化されている～
講師 三菱電機住環境システムズ株式会社
参加費 会員500円 会員外1,000円
定員 80名(申込先着順)

住宅を設計する仲間達 勉強会
「LCCM住宅とこれからの住まい」
11/30 CPD2単位

年内には「都市の低炭素化の促進に関する
法律(低炭素化促進法)」が施行される予
定で、住宅の一層の省エネルギー化が不可
欠となっています。
その背景の中で、開発が進んでいる「LCCM
住宅(ライフサイクルカーボンマイナス住
宅)」についてお話しいただきます。
日時 11月30日(金) 18:30～20:30
場所 大阪府建築士会会議室
講師 清水務
(積水ハウス(株)温暖化防止研究所)
定員 50名(メンバー優先・申込先着順)
会費 住宅を設計する仲間達メンバー 無料
建築士会会員 1,000円
建築士会会員外 2,000円
※FAX又はメールで、参加申し込みの上、
勉強会当日直接会場にお越しください。

リカルド レゴレッタ作品パネル展
12/8～12/9

現代的感覚とメキシコの伝統文化を融合する
建築家リカルド レゴレッタ(2011年12月没)
の作品パネル展を開催いたします。高松宮殿
下記念世界文化賞(建築部門)を受賞した彼
の迫力のある大パネルを多数展示します。
日程 12月8日(土)～12月9日(日)
時間 10:00～17:00
会場 大阪府建築士会 会議室
参加費 無料

2012年建築関係団体
合同忘年懇親会
12/14

日時 12月14日(金) 18:00～19:30
(受付17:30～)
会場 シティプラザ大阪2階[旬]
大阪市中央区本町橋2-31
(地下鉄堺筋本町駅12.1号出口より
徒歩6分。地下鉄谷町四丁目駅4号
出口より徒歩7分)
会費 5,000円
定員 300名
福引 豪華景品を進呈(有志のご寄贈品を含む)
申込締切日 11月19日(月)
※会費を添えて11月19日(月)までに本
会事務局までお申込下さい。11月26日
(月)以降のキャンセルについては、会
費のご負担をお願いします。

平成25年在阪建築14団体
合同新年交礼会
1/4

日時 1月4日(金) 15:00～16:00
会場 シェラトン都ホテル大阪 浪速の間
大阪市天王寺区上本町6-1-55
会費 3,500円
申込締切日 12月5日(水)
※会費を添えて12月5日(水)までに本会事
務局までお申込ください。12月7日(金)以
降のキャンセルについては、会費のご負担
をお願いします。

建築士の会 北河内
～大阪府域における精神医療の中心的病院施設～
大阪府立精神医療センター見学会
2/9 CPD2単位

建築士の会 北河内では、この度、大阪府立
精神医療センター、大阪ハートケアパートナ
ーズ及び安井建築設計事務所、戸田建設のご
協力のもと、平成24年度に完成予定の「大阪
府立精神医療センター」の見学会を行います。
日時 2月9日(土) 13:00～16:30
集合場所 京阪交野線「宮之阪駅」改札出口前
募集 40名(申込先着順)
参加費 1,000円
※懇親会参加費 別途3,500円程度必要
行程 13:15～ 百済寺跡見学
14:00～16:30 精神医療センター見学
17:00～19:00 懇親会
※参加証は実施1週間前に出状予定です。

このINFORMATIONページの内容は本会ホームページのトップページにも同時掲載しています。本会ホームページからも予約することができます。詳細は下記の本会ホームページへアクセスしてください。(建築情報委員会)
【大阪府建築士会ホームページ】 <http://www.aba-osakafu.or.jp/>

本会の催し参加申込方法

FAX・メール・郵送で、催し名、
参加者名、会員 No、勤務先、参
加証送付先住所、同電話 &FAX
番号(自宅又は勤務先)を明記
の上、事務局までお送り下さい。
問合・申込
大阪府建築士会事務局
〒540-0012 大阪市中央区谷町3-1-17
TEL.06-6947-1961 FAX.06-6943-7103
メール info@aba-osakafu.or.jp
HP <http://www.aba-osakafu.or.jp/>

時間 9:15～16:30
会場 大阪木材相互市場4階会議室
大阪市港区福崎1-2-1
費用 1,000円(テキスト・教材費含)
定員 30名(定員なり次第締切)
問合 大阪府地域産材活用フォーラム事務局
(一財)大阪住宅センター
Tel.06-6253-0073

団地再編住みよいまちへ 2012
海外等の団地再生先進事例の動向とわが国
におけるストック活用型団地再編への展望
―関西大学 戦略基盤・団地再編プロジェクトからの提案―

■展覧会
日時 11月8日(木)～11月12日(月)
10:00～17:00(最終日は15:00まで)
会場 大阪くらしの今昔館企画展示室
大阪市立住まい情報センター8階
大阪市北区天神橋6-4-20

■関連講演会
日時 11月17日(土) 14:00～17:00
会場 大阪市立住まい情報センター3階ホール
講師 江川直樹(関西大学教授)
増永理彦(神戸松蔭女子学院大学教授)
定員 100名(先着順)
問合・申込 大阪市立住まい情報センター
住情報プラザ
「団地再編・住みよいまちへ2012」係
Tel.06-6242-1160
<http://www.sumai-machi-net.com/>



芳村隆史
株式会社 碧-AO-建築事務所 代表取締役
統括設計専攻建築士
1956年 大阪市中央区生まれ
1981年 関西大学大学院工学
研究科修士課程修了
1981年-1988年
株式会社 小河建築事務所 勤務



新公式ホームページ
<http://www.aba-osakafu.or.jp/>

生涯学習文化講座「近代建築探訪」

(1)淀屋橋周辺の優れた都市資産、近代建築
の現地見学会。
日程 11月12日(月)
集合時間・場所 13:30 大阪市役所正面(御堂筋側)
(2)幻燈で見る明治建築
「近代の遊郭建築について」余り知られてい
ない懐かしい大阪周辺の旧飛田、旧堺・竜神
などの遊郭建築を学習します。
日時 11月13日(火) 13:30～
会場 葉業年金会館
講師 (1,2共)明治建築研究会 柴田正己
問合 (1,2共)澤標(みおつくし)
Tel.06-6944-0869

東北の手しごと展

東北の方たちがつくられた「布クラフト」
が大阪の地にやってきます。
主催 東北の手しごと展実行チーム(日本建
築家協会・近畿支部・大阪地域部会有志)
日時 12月6日(木)～12月10日(月)
11:00～18:30
会場 杉 deあじょう亭(布クラフト展示・販売)
天神橋筋2丁目商店街 中央カラー現像所内
連絡先 東北の手しごと展実行チーム
期間中の連絡先 Tel.050-3631-4510

第19回「建築構造用鋼材とその
利用技術」講習会(大阪開催)

日時 12月7日(金) 10:00～15:00
会場 ホテルコムズ大阪6階 華
大阪市北区豊崎3-18-8
定員 180名(定員なり次第締切)
受講料 建築士会会員 2,000円
(テキスト・参考資料代含)
問合 (一社)日本鉄鋼連盟経営政策本部
Tel.03-3669-4815
<http://www.jisf.or.jp/info/event>

大阪歴史博物館
特集展示「大阪の茶の湯と近代工芸」
武者小路千家の茶人・三代木津宗詮と大阪の職方―

「茶室建築家」としても活躍した三代宗詮の
図面、大工・平田雅哉の工芸作品も展示。
期間 開催中～12月3日(月)
時間 9:30～17:00(金曜20:00まで)
(入館は閉館30分前まで)
休館日 毎週火曜日
観覧料 常設展示観覧料でご覧いただけます。
詳細はHPをご覧ください。
<http://www.mus-his.city.osaka.jp/>
会場・問合 大阪歴史博物館
大阪市中央区大手前4-1-32
Tel.06-6946-5728

大阪府建築士会活動報告
市民社会に建築士会活動を発信
芳村隆史(建築情報委員会委員長)
建築情報委員会では、建築行政の動き、
建築法令、建築の最新技術などの情報を
建築士に提供すると共に、市民社会に建
築士会活動などを分かりやすく発信して
います。
具体的には、
①各委員会活動情報の纏めと発信の促進
②一般社会・マスコミ全般への情報発信
③建築人・公式ホームページ・フェイス
ブックの運営管理
④広告取得の強化
⑤情報デバインド対応の推進
今年度の活動は次のとおりです。
一、建築人の新創刊
四月より誌面を次の編集方針を掲げて
リニューアルし「新創刊」しました。
①情報伝達(インフォメーション)
②会員活動紹介(プレゼンテーション)
③会員交流(オピニオン)
④技術研鑽(ラーニング)
⑤建築人賞(フィロソフィー)
なお、新しい「建築人」には、一般号
と季刊号を設け、季刊号(1・4・7・10
月)ではより密度の高い情報提供を行っ
ています。試験的に来年の三月まで、公

式ホームページにおいて建築人の全誌面
を公開し、市民社会にも建築士会活動な
どを発信しています。
二、新公式ホームページの公開
七月より新会長就任に合わせ、公式
ホームページもリニューアルしました。
アイキャッチ画像・イベントカレンダー・
WEB申込・「いいね」ボタン・フェイ
スブックとの連動など新機能も充実さ
せ、公式ホームページでは信頼性のあ
る確定情報を提供し、連動したフェイス
ブックは顔の見えるタイムリーなコミュ
ニケーションツールと位置づけています。
三、図書WG(ワーキンググループ)
来年三月の図書スペースの見直しに伴
い、建築士会が保有している蔵書、今後
の寄贈圖書の取り扱いについて、各委員
会より代表者に参加頂き検討しています。
四、アメリカリストの再生
今年度末までに、営業活動を含めた新
しいメーカーリストの形態を提案する準
備をすすめています。
以上、建築情報委員会は、「社会に必
要とされる建築士の団体」としての情報
発信に取り組んでいきます。



の味わい深いいぶし瓦をシンプルにすることで、モダンなフラット型平板瓦「銀陵」を誕生させました。和瓦本来の優れた質感と機能性に洋瓦のモダンなフォルムが融合し、屋根に整然と葺かれた時の直線的ラインがいつまでもシンプルな美しさを奏でます。極限までシンプルさを追求したフラット型平板瓦「銀陵」には、袖瓦のフラット形状による一体化やあらゆる勾配に対応できる隅棟3点部品化など、こだわりの工夫が施されています。今後はフラット型平板瓦「銀陵」で黒いぶし・窯変ができないか研究を進めています。

建築士の方で、瓦を検討されているのなら、極限までいぶし瓦をシンプルにすることで実現したモダンなフラット型平板瓦「銀陵」のつくり出す新しいデザインを是非ご検討下さい。

取材：芳村隆史／建築情報委員会委員長



銀陵（フラット型平板瓦）

淡路瓦イズム

『銀陵 Ginryo』

馬詰瓦産業

<http://umazume.net/>

淡路瓦は、江戸初期以来400年の歴史を持ち、中でも淡路島の良質の粘土を活かしたいぶし瓦の生産量は日本一を誇ります。淡路瓦工業組合は、日本らしい感性あふれるまちなみを全国に創り出すという夢と意気込みを持っています。400年の伝統とこれからの挑戦を融合した『淡路瓦イズム』を通し、これからの時代に必要とされる瓦づくりに挑みます。

今回はその『淡路瓦イズム』を実践している馬詰瓦産業を訪問しました。馬詰瓦産業は、社寺・茶室・一般住宅向けにいぶし瓦を製造・販売しており、特に平板瓦は自社で製造・開発し、20年の歴史を持っています。

悠久の歴史を受け継ぐ淡路瓦の更なる可能性を求めて、馬詰瓦産業では、伝統的な焼き手法



施工例：浄谷コミュニティセンター（三木市）

■淡路瓦のお問い合わせ先
淡路瓦工業組合
兵庫県南あわじ市湊134
Tel.0799-38-0570 Fax.0799-37-2030
info@a-kawara.jp
<http://www.a-kawara.jp/>

理事会報告

文責 本会事務局

日時 十月十七日(水)十六時～十七時四十五分
場所 本会会議室

出席 理事四八名(委任八名含) 監事一名
名誉会長、顧問、相談役他七名

【審議事項】

(一) 会計報告

収支差引の推移は、上半期の時点で二十三年度二〇、九四四円、二十四年度二七、二五二円と昨年度比で約六〇〇万円の向上きであるが、木造耐震講習会が改訂を契機に受講者が延びたこと、また昨年は未実施だったことでの差異が主要因である。

(二) 二十四年度収支精算(中間)報告

現段階での決算見込みを収支差引約△五七〇万円の予測で報告した。

対予算比でみる主な要因を次に記す。

収入減では、和泉市事情による契約期間の短縮、本試験受験者数減と登録者数減の連鎖、CPD単位取得講習会の企画低迷がある。

予算維持では、建築情報事業関連、定期講習、耐震診断講習会が挙げられる。

支出減では、大阪建築コンクール及び全建女大会の隔年実施移行による本年度の休止がある。

支出増では、事務局移転時期遅延による賃借料の増がある。なお、事務局移転費用は、保証金と相殺する予定であることから来年度負担になる見込である。

また、事務局人件費削減について、会長、職員間で減額を交渉中である。

(三) 理事数の変更について

前月度理事会において会長意向が表明された理事数の削減については、二十四年度五〇名、二十五年度四十四名、二十六年度三十六名と半数改選のために段階的に減数することが承認された。

建築相談

建築士の見たトラブル事例(四)

責任の所在

文 神保勲+橋本頼幸

建築は建築主と設計監理者と施工者のみならず、様々な人や会社に関係してきます。下請けの協力会社、その職人、材料のメーカー、その材料を扱う代理店、などなど。様々なシーンでだれにだけの範囲の責任があるのかを明確にし、責任の範囲をうまく切り分けていかないと大きなトラブルに発展してしまうことがあります。本来、建築主に最も近い設計監理者や元請け施工者(現場代理人)はその切り分けを常に意識しながら業務に取り組んでいくことが大切です。また最近では施主の注文に無理があることもあります。今回は「責任はどこにあるのか?」といったお話について神保委員に記事を執筆いただきました。

今年の夏もゲリラ豪雨が各地を襲った。京滋バイパスが四八時間も通行止めとなるなど各地の被害も様々であった。築四五年以上を経た我が家は「紺屋の白袴」「医者の不養生」。アルミサッシの周囲で漏水を起こした。普段の雨では問題は無いが、ゲリラ豪雨では雨水が部屋内部に侵入してしまう。

ゲリラ豪雨の様な雨や風を伴う強い雨が降ると漏水を起こすと言う話をよく聞く。サッシュ廻りのみならず、瓦屋根の間からも雨水が侵入する。「古くなれば建物は漏れる」と達観すれば問題はない。我が家の場合、責任の所在は私自身となる。一方、新築の家、改修した家で漏水が生じた場合、持ち主は、設計者や施工者に瑕疵があったとして責任を追求してくるであらう。建築相談でも屋根の改修工事を行った木造

住宅で、屋根からの漏水について相談を受けた事例がある。面接相談者として相談会場に

られた相談者さん。取り替えられた古い瓦棒屋根の棟包み材を持ち込んで、「この部材では漏水していたが、どの様に思われますか?」との相談。聞けば屋根上部でベンチレーター(役割を果たす様な空気抜きを付加する様な工夫をして欲しいと施工者へ注文。見れば棟包み部材には空気抜きらしき四角いスリットと箱状の水溜り、水溜りの底には雨水を水下に逃がす為の丸い穴がボツボツと穿たれている。雨水はスリットから入り込むが、水溜りの底の丸い穴を通じて瓦棒屋根の平場鋼板に落ち、水下へと導かれるらしい。確かに漏水し易い構造であることは否めないが、片側だけの言い分だけで全体を正しく判断することは難しい。「漏水したのは残念ですが、あなたの意向に沿った工夫が随所に見られますね。」と私。「でも漏水したんですよ。メーカーの標準的な材料ではないらしいです。この材料では漏水しますよね。工事方法にも問題があったんですよ。」と相談者。

「あなたの注文自体にも無理がありますよ。」と言いたかった。屋根の上に漏水し易い様な穴を開けて欲しいと指示した施主にも責任があると考えたからである。勿論、漏水するかもしれないと説得できずに施主の意向を尊重しすぎた施工者にも責任はある。第三者から見れば責任の所在は双方にあると思われる事例である。後日、無償で修繕し潔く自らに責任の所在があることを認めた施工者に拍手を送りながらも、相談者さんには「無償で修繕して貰える良い業者さんと巡り会えて良かったですね。」と納得して帰宅して戴いた。私の相談内容には責任が生じないのだろうかと改めて考えさせられた事例である。

大阪ホンマもん解説

写真 田龍哲也 文 牧野高尚

大阪ミナミの歓楽街と言えば、歌にもなった宗右衛門町界限。その歴史は古く、始まりは江戸時代にまで遡る。道頓堀川の開削と共に川の両岸に町家が開発された。これが宗右衛門町の原型だ。明治以降、高級料亭や老舗のお茶屋が軒を連ねる「南地五番花街」のつとして名を馳せ、所狭しと建物が軒を連ねていた。しかし、太平洋戦争が勃発するとこの界限も戦争の暗い影に覆われていく。昭和二〇年の大阪大空襲で道頓堀界限の歓楽街などが根こそぎ灰塵と化した。戦後、復興を遂げる中、複合遊興ビルが建ち並び、キャバレーなどが大繁盛していた。

時代も移ろいその建物は、主に駐車場として利用され、近年には花屋もオープンしている。周りの商業建築とはかけ離れた風貌で、装飾美はそぎ落とされ躯体のみが露わになった建築に、何処かしら、今の日本を重ねてしまう。

現在は通りに石畳を敷き、街並み整備を進め格式高き花街復権へ移行中。まずは五〇年後を想像して頂きたい。

建築人 11

2012

監修 社団法人大阪府建築士会 建築情報委員会
編集 建築情報委員会『建築人』編集部
編集人代表 米井 寛
編集人 荒木公樹 橋本頼幸
牧野高尚
事務局 山本茂樹 母倉政美
印刷 中和印刷紙器株式会社



苦楽園の家 二宮俊一郎

ほとんどの建築がそうであるように、この建築も敷地に固定されている。敷地に固定されるという事は、必然的に敷地と相互作用を持つ。敷地と対話する事で建築の骨格を形成し、その相互作用が建築にとって良好な環境を生成される事を目論んだ。

この建築の立つ敷地は極端な旗状敷地で前面道路からは見えない。小川のような水路沿いの緩くカーブした路地の先に開た荒れた平地が、この建築の敷地である。北側と西側は、この敷地から3mほど高いレベルの隣地。東側は5mほど下がった隣地であるが、4階建の既存建物が視界を塞ぐ。南側は水路を挟み、この敷地とはほぼ同レベルの隣地であるが、隣地に林立した10mほどの高木が視界を塞ぐ。僅かに残されたのは南東角に開いた視界。一見、使いようの無いヘタ地である。

建築のプログラムはオフィスを併設した住居。各々が独立しながらもシームレスな関係を持つ事。2つのエントランス。来客用も含めた3台分のガレージと車寄せ。これらの要素を敷地と対話しながら成立させる事が求められた。建築そのものは、南面だけを解放し内部空間に借景を取り込む事で奥行きと解放感のある空間構成とした。敷地との対話した結果、緑や水、空や風を身近に感じられる建築となった。敷地との対話による相互作用により、使いようの無いヘタ地は良好な環境へと変質した。

撮影：富田英次 第4回建築人賞受賞作品

■プロフィール

二宮俊一郎
1966年 鹿児島県生まれ
1989年 大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業
1997年 一級建築士事務所エヌアールエム設立
諸留智子
1966年 大阪府生まれ
1989年 大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業
1997年 一級建築士事務所エヌアールエム設立

■建物データ

設 計：一級建築士事務所エヌアールエム
二宮俊一郎＋諸留智子
施 工：株式会社 創建
所 在 地：兵庫県西宮市
竣 工：2010年
構造規模：鉄筋コンクリート造 地上2階建
敷地面積：496.86㎡
延床面積：340.47㎡

